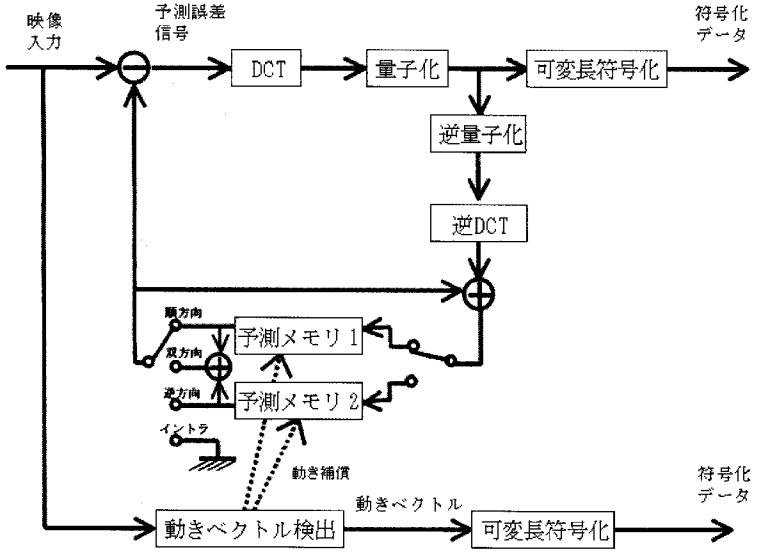
別表第一号　デジタル放送の標準方式第四条第一項に規定する映像信号の圧縮手順及び送出手順



注１　ＤＣＴは、離散コサイン変換処理を示し、映像の水平方向をｘ軸、垂直方向をｙ軸とした場合のＮ×Ｎの画素f(x,y)に対する２次元ＤＣＴ係数F(u,v)は、以下のとおり定義される。

$$F(u,v)=\frac{2C(u)C(v)}{N}\sum_{x=0}^{N-1}\sum_{y=0}^{N-1}f(x,y)\cos\left[\frac{(2x+1)u\pi}{2N}\right]\cos\left[\frac{(2y+1)v\pi}{2N}\right]$$

ただし、

$$C(u),C(v)=\begin{cases}1/\sqrt{2} & \text{for}\quad u,v=0\\ 1 & \text{for}\quad u,v\neq 0\end{cases}$$

２　逆ＤＣＴは、逆離散コサイン変換処理を表し、以下のとおり定義される。

$$f(x,y)=\frac{2}{N}\sum_{u=0}^{N-1}\sum_{v=0}^{N-1}C(u)C(v)F(u,v)\cos\left[\frac{(2x+1)u\pi}{2N}\right]\cos\left[\frac{(2y+1)v\pi}{2N}\right]$$

３　順方向とあるのは、順方向予測符号化（過去の画像情報を用いて動き補償予測を行うものをいう。）を示し、双方向とあるのは、双方向予測符号化（未来及び過去の画像情報を用いて動き補償予測を行うものをいう。）を示し、逆方向とあるのは、逆方向予測符号化（未来の画像情報を用いて動き補償予測を行うものをいう。）を示し、イントラとあるのは、イントラ符号化（動き補償予測を行なわず、現在の画像情報のみを使用するものをいう。）を示すこととする。

４　逆量子化及び可変長符号化は、ＩＴＵ―Ｔ勧告Ｈ.262に従うものとする。なお、可変長符号化器の出力のデータの順番は、以下のいずれかによるものとする。

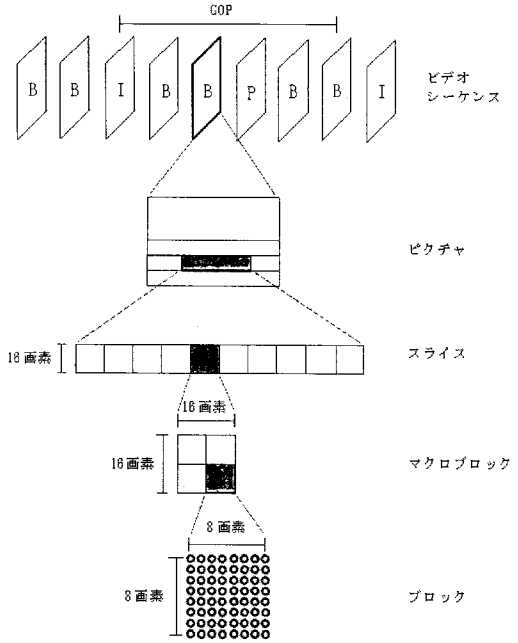
v＼u	0	1	2	3	4	5	6	7
0	0	1	5	6	14	15	27	28
1	2	4	7	13	16	26	29	42
2	3	8	12	17	25	30	41	43
3	9	11	18	24	31	40	44	53
4	10	19	23	32	39	45	52	54
5	20	22	33	38	46	51	55	60
6	21	34	37	47	50	56	59	61
7	35	36	48	49	57	58	62	63

v＼u	0	1	2	3	4	5	6	7
0	0	4	6	20	22	36	38	52
1	1	5	7	21	23	37	39	53
2	2	8	19	24	34	40	50	54
3	3	9	18	25	35	41	51	55
4	10	17	26	30	42	46	56	60
5	11	16	27	31	43	47	57	61
6	12	15	28	32	44	48	58	62
7	13	14	29	33	45	49	59	63

５　動きベクトル検出は、マクロブロック単位に行うものとする。

６　符号化データは、ＩＴＵ―Ｔ勧告Ｈ.262の映像ビットストリーム構文に従い生成するものとする。

別表第二号　符号化後の映像信号の構成



注１　ビデオシーケンスは、符号化を行う最上位の構文構造であり映像信号を構成する一連の画面を示すものとする。

２　ＧＯＰは、Ｉピクチャ（現在の画像情報のみを使用して符号化された画像をいう。）、Ｂピクチャ（現在、過去及び未来の画像情報を使用して符号化された画像をいう。）又はＰピクチャ（現在及び過去の画像情報を使用して符号化された画像をいう。）により構成され、少なくとも１枚のＩピクチャを含むものとする。

３　ピクチャは、１枚の画面を示すものとする。